

日本人としての通訳者

三重 綾子

「アメリカの雰囲気は憧れ、アメリカの全てが日本より優れている。」これは私が中学三年生の時から潜在的に思っていた事だ。アメリカを夢見て、アメリカに住みたくてアメリカに留学した。それは高校二年生の時だった。そして高校を卒業して立教大学法学部に入学したが、英語が得意で、英語のクラスは本業の法律の勉強よりも熱を入れて参加している。新聞を英語で読み、英語のペーパーバックを読み、手紙も英語で書く。これが私のライフスタイルである。私にとって英語とは何かときかれましたら、それはただ「好きなもの」ではなく、「それなしではいられない生活の一部、そして私の全て」と答えたであろう。鳥飼先生の授業を受けるまでは。

そもそも私が鳥飼先生の同時通訳の授業をとったのは、実際に通訳を目指しているからである。四月当初は今までの大学の英語の授業との違いに少しとまどったが、やがて授業にもなれ、興味深い授業が展開されていった。私が先生の授業で最も印象に残ったものは「ここが変だよ日本人」というバラエティ番組のコソボ問題特集で日英・

英日の逐次通訳をしたときのことだった。私はこの番組は好きで毎回見ていたのであるが、その時は外国人の不思議な法則というものに気がついた。これは知人から進められて読んだ鈴木孝夫著の「日本人はなぜ英語ができないのか」においても論じられている事なのだが、アメリカ人バネリストは必ずといっていいほど「だから日本は駄目なんだ！」という風に日本を攻撃する。一方中国人は日本を攻撃しはするのだが、それと同時に「だから中国は素晴らしい」という風に、中国の素晴らしさを宣伝する論法に論議を摩り替えてしまうのである。鈴木孝夫氏によればアメリカは言語を学ぶ理由を攻撃型、中国は自己顕示型という分類していた。

では日本人はどうなのか。同氏によれば、日本人は英語を日本語よりも優れたものとして、そして英語を学ぶ事によって自分、そして社会を改善したいという、自己・社会改造型だという。私も鈴木氏も分類は正しいと思う。実際私自身がそうであり、私の周りの同じように英語を学ぶ人はみなそうだからだ。これは英語を学ぶ動機としては十分である。しかし通訳者が深層心理

で、「英語は日本語よりも勝っている、だから英語を使ってこそ自分は躍進できる」と日本語を否定的に捉え日本語のインプットを怠ってしまったとしたらどうか。

日本人の通訳者として仕事をするのであれば、まれなケースもあろうが、フランス語の国際会議をドイツ語にというのではなく、日本語を外国語に、外国語を日本語にというように、日本語が必ず介在する仕事であるに違いない。そこで仮にも日本語のインプットを怠ってきた通訳者であれば、まず正しく通訳するという作業はできないのではなからうか。

鳥飼先生の授業を通して、何度か英日の通訳をする機会があったが、これは私にとっては大変に難しいことだった。普段、英語ばかりのインプットにおわれ、日本語のインプットを怠っていた私には、流暢な日本語訳どころか、意味さえ通じない、つたない日本語訳となってしまうことが多々あった。

このことを痛感したのが、まさにマクベイン博士講演会であった。博士の講演の原稿は事前に渡されていたから良かったのだが、その後の質疑応答の時は、正にリアルタイムの通訳だったため、何度も頭の中が真っ白になり、鳥飼先生の熟練したフォローで何とか乗り切ったといった感じだった。やはりこの時も、日本語をいかに巧みに、的確に操るかということが問題だった。私はこの時ほど自分の日本語能力の無さ、そして日本語の語彙の少なさを痛感したことはなかった。的確な言葉が

出てこない為に、多くの誤解、国家のトップ同士の国際会議においてはそれが戦争の引き金になることもありうる。そして、このような場の架け橋をしているのが通訳者の訳語である。

今まで私は、通訳とは英語が出来さえすれば良く、とにかく英語の読み書き、そして話すことが第一のプライオリティだと思っていた。しかし、鳥飼先生の授業やマクベイン博士の講演会での経験を通して、本当に当たり前のことではあるが、改めて日本語そしてその背景にある日本文化を理解することの大切さを体感できた。言葉は文化と表裏一体である。言語も文化も生き物であり、刻々とその姿を変えている。英語のそれが常に新しくなる様に、我々大和民族がこの地球に生を受けてから使っている美しい日本語も文化と共に瞬間瞬間にその姿を新しいものにしていく。我々は文化に触れて言葉というものを知り、言葉を理解することによって、文化を伝えていく使命があると思う。だから、それを使う我々は敏感にそれをインプットしていかなければならないのではないか。

私にとって英語とは何かと今聞かれたら、「それなしではいられない生活の一部、そして、日本文化と他文化の『架け橋』として日本語と共に磨きをかけていきたいもの。」と答えるだろう。そして、美しい的確な日本語訳のできる通訳者にいつの日かなりたい。

(みえ あやこ 本学法学部法学科3年次)